

無常観と出家志向

——マハーバハーラタと原始仏教——

村上 真 完

(東北大学助教授・文博)

目 次

- 1 発 端
 - 2 ヴェーダの学習と四住期の掟（父の立場）
 - 3 無常観と出家修行の志望（子の立場）
 - 4 死の克服の道
- 註

は じ め に

大叙事詩『マハーバハーラタ』(*Mahābhārata*, *MBh* と略)の中で、哲学的内容を多く含む『モークシャダハルマ篇』(*Mokṣadharma-ṭarvan*, 解脱法品, *Mdh* と略)の初めの4章(*MBh* 12.168~171)は、仏教やジャイナ教に共通の素材を含む。いまは、その中で、無常観にもとづく出家の志向がうかがわれる1章(*MBh* 12.169)をとりあげてみたい。

Mdh は初め(*MBh* 12.168)に、悲しみや苦をいかにして克服するかを問題とし、結局、無欲を教え、渴愛の滅(*trṣṇā-kṣaya*)を最上の楽(幸福)とする。渴愛の滅を説く点は原始仏教とも共通である。さて、無欲とは所有欲の否定でもある。ここに無所有の教えが説かれる(*MBh* 12.170~171)。無所有の実践は出家し孤独にして無一物の生活をするることである。ジャナカ王に帰せられる無所有の歌(*MBh* 12.171.56)も、ボードッヤの歌(*MBh* 12.171.61)も、出家遁世を前提としている。

これまで出家遁世については、未だ十分にふれなかったもので、以下に考えてみたい。

第12篇第169章（P, D第175章）

—メーダハーヴィンの出家の志（父子の対話）—

1 発 端

仏教もジャイナ教も出家を説く。しかもその出家とは、老いてから家督を息子に譲って隠居するとは限らない。むしろ若い時の出家を説くのである。そのような出家の教えが、*MBh* のこの章に説かれていると考えられるのである。何故に出家して修行しなければならないのか、その理由（無常観）とともに詳しく説かれる。ここに仏教とも共通の見方が認められる興味深い1章である。

この章は従来の版本においては *Mdh* に2度繰返される（P.12.175, P.12.277）。Pはこの章を「父子の対話の物語」（*pitā-putra-saṃvāda-kathana*）と呼ぶが、2度目には「父子の対話」（*pitā-putra-saṃvāda*）という。この章には仏教（*Jātaka* No.509 *Hatthipāla-jātaka*, その他）とジャイナ教（*Uttarādhyāyana-sūtra* XIV）とに共通の詩節が見出され、ヴェーダの読誦等に対する批判と、無常観と出家の志望が共通に語られている。この章の父子の対話の筋は *Mārkaṇḍeya-purāṇa* Xff. にも認められるが、詩句を同一にするところは殆どないようである。

この章もユデヒシュテヒラ（*Yudhiṣṭhira*）がビヒーシュマ（*Bhīṣma*）に問う形で進められる。

『ユデヒシュテヒラは言った。

あらゆる有類の滅亡をもたらす（*sarva-bhūta-kṣayāvaha*）この時（*kāla*, 時間）が過ぎ去っていくときに、いかなるよきこと（*śreyas*）に努力すべきか。それを私に説かれよ。祖父上よ。』

(1)

（*MBh* Cr.1.169.1, P.12.175.1=12.277.1）

無常なる時の下に何に努力すべきか、という問いである。無常観はこの章の前提となる。それに対する解答がこの章の主題となる。

『ビヒーシュマは言った。

ここでも〔人々は〕、古き伝承物語（*itihāsa*）を引きあいに出す。〔即ち〕父と子との対話を〔引きあいに出す。〕それを聴け。ユデヒシュテヒラよ。

(2)

王よ。〔ヴェーダの〕読誦をよろこぶ（*svādhyāya-nirata*）或る再生族の者（婆羅門）に名をメーダハーヴィン（*medhāvin*）という賢明な息子があ

った。 (3)

その息子は、〔ヴェーダの〕読誦をなすのをよろこんでいた父に言った。
 以〔その息子は〕解脱と法（義務、善）と実利とに通曉し（*mokṣa-dharmārthakuśala*）、世間の真実に明るいもの（*loka-tattva-vicakṣaṇa*）であった。

(4)

父よ。賢者（*dhīra*）は一体何を知って〔何を〕なすべきか。人々の寿命は速かに尽きるのだから。

父よ。それによって〔私が〕法（義務、善）を行うように、私に意味の連関に従って順次に説かれよ。

(5)』

（Cr.12.169.2~5, P.12.175.2~5=P.12.277.2~5）

以上は物語の発端である。この父はヴェーダの読誦をよろこび、ヴェーダに関しては疑いをもっていない。しかし息子はそれに満足していないで、更に高きものを求めていることが、次の対話から知られる。

2 ヴェーダの学習と四住期の掟（父の立場）

『父は言った。

息子よ。梵行（童貞行）によってヴェーダを学んでから、父祖たちの浄化のために子供たちを〔儲けようと〕欲すべし。

〔祭〕火を保ち規定（儀軌）の通りに供犠を捧げて、〔それから出家して〕森に入って、それから聖者（牟尼）となろうと願うべし。

(6)』

vedān adhītya brahma-caryeṇa putra putrān icchet pāvanārtham pitṛpām/*

agnīn ādhāya vidhivac ceṣṭa-yajño vanam praviśyātha munir bubhūset//²²

（Cr.12.169.6, P.12.175.6, P.12.277.6）(*P.12.277.6a *adhītya vedān brahma-caryeṣu...*）

父のいうところは恐らくは四住期（*cāturāśramya*）の掟（法）であろう。即ちそれは、童貞をまもり師家に住してヴェーダを学び（学生期、梵行期）、家に帰って結婚して子供を儲け、祭火を保ち諸の祭事行為を行い（家住期）、それから隠棲して森に住み（林住期）、更に一処不住の遊行者となって死期を待つ（遊行期）というのである。尤も、上においては、林住期と遊行期とが明確に分けられるのかどうか、はっきりしないようでもある。この四住期の規定は、法経・法典類の述べるところでもあり、*MBh* でも後に Cr.12.184-185に

詳しく説かれるのであるが、本章では重視されない。尤も出家を尊ぶ趣旨であるから、林住期と遊行期に関係あるともいえるが、前提となるべきヴェーダの学習や祭式の実践を問題としていない。父子の対話はヴェーダの宗教（父の立場）に対する批判（子の立場）を示している。

同様の対話は仏教では *Jātaka* No. 509 *Hatthipāla-jātaka* (護象本生物語³⁾。 *Jātaka* vol. IV pp. 473-491) の中に見られる。そこでは *Esukārin* 王とその司祭 (*purohita*, 国師) には子がなかったが、司祭が樹神 (*rukkha-devatā*) に強要して *Hatthipāla* を始めとする4人の子を儲ける。後に王と司祭 (父) はその子を王位につけようとするが、4人とも断って出家してしまい、結局、司祭も王も皆出家してしまったという。この父 (司祭) が長子ハッテヒパーラに語る言葉 (第4偈) が、まさに前述の偈と殆ど意味が等しいのである。即ち『子よ。ヴェーダを学んでから、財を求めよ。息子たちを家に安住させて、諸香、諸味を全て享楽してから、森〔に住する〕はよろしい。その聖者は称讃される。』 (*Jātaka* IV. p. 477¹⁸⁻²¹)

adhicca vede pariyesa vittaṃ putte gehe tāta patiṭṭhapetvā
gandhe rase paccaṇubhūtvā sabbam āraññaṃ sādhu muni so pasattho

尤も語句としては正確に対応していない (正確に対応しているのは最初の二語にすぎない) が、意味上、さきに見た *MBh* (Cr.) 12.169.6 に一致すると見られる⁴⁾。

上の父のことばに対して子は

『ヴェーダも真実ではない。財の獲得も〔真実では〕ない。子を儲けることによって老を追い払わない。香、味において離脱することを善人たちは説く。自分の業によって果の獲得がある』 (第5偈, *Jātaka* IV. pp. 477²⁹-478²) というのであり、更に死と老と病とに人はとらえられていると説いて、出家するのである。*MBh* のこの章の偈との逐語的に一致する偈は他にはないが、このジャータカの、ヴェーダ批判と、老死を克服するために出家修行することを称揚する立場は、ほぼ共通であると考えられる。

Hatthipāla-jātaka と話の筋が類似し、更に共通な偈を有するものにジャイナの聖典 (根本経 *Mūla-sutta*) *Uttarādhyaṇa-sūtra* (*Uttarajjhāyana*, *Uttarajjhāyā*, *Utt.* と略) XIV⁵⁾ があり、そこでも本章と共通の偈が認められる。そこでは出家を志した2人の息子と父 (司祭) との対話に始まり、司祭も妻を説得して共に出家し、またそれを聞いた王妃は王 *Usuyāri* (Sanskrit: *Isukārin*⁶⁾) に出家をすすめる。ここでも父が子にいうことばが、先の場合と

殆ど同様である。即ちその第9偈はこうである。

ahijja vee parivissa vippe putte paritṭhappa gihamsi jāyā/
bhoccāṇa bhoe saha itthiyāhiṃ āraṇṇagā hoha muṇi pasatthā//
(*Utt.* XIV. 9)

これをサンスクリットにおきかえると次のようになる⁷⁾。

adhitya vedān pariveṣya viprān puttrān pariṣṭhāpya gehe jātān/
bhuktvā bhogān saha strībhir āraṇyakau bhavataṃ muṇi praśastau//
『ヴェーダを学んでから、婆羅門 (賢者) たちに食事を給し、生まれた息子たちを家に安住させて、女達と共に享楽を受けてから、森に住し称讃される聖者となれ。』

この文は先の *MBh* 12.169.6 のと比較すると、最初の二語は対応しているが他は正確には対応していない。ただ内容上は趣旨の一致が見られるといえよう。先に見た *Jātaka* 509 *gāthā* 4 とはよりよく一致している。

さて、これに対する息子たちのことばは、さきのジャータカ (第5偈) と同様にヴェーダの学習に対して批判を加え、

『学んだヴェーダは救い (*tāṇa* = *trāṇa*) とはならず、食を得た再生族 (婆羅門) は闇をもって闇に導く。また生まれた息子たちも救いとはならない。

一体誰が汝のこの〔意見〕に同意するであろうか』 (*Utt.* XIV. 12)⁸⁾

という。但し婆羅門に食事を供すべしということは、先のジャータカにも *MBh* (Cr.) 12.169.6 にもない。上のようなヴェーダの学習に対する明らかな批判はジャータカにおいても見られたが、*MBh* のこの章にはない。しかし、ヴェーダの学習を始めとする四住期への批判がそこにおいても意図されている。

なお父が子にヴェーダの学習を始めとする四住期の生活をすべきことを勧めることは、*Mārkaṇḍeya-purāṇa* X.11~13 にも記されており、それに対して子は輪廻の苦を説き、3 ヴェーダの諸の行事は価値なく正しくない (X.28)⁹⁾ と説くこともそこに見られる。但し先の例との語句の一致は殆どない。それはともかく、ヴェーダへの批判が広く認められる、といってよいであろう。ヴェーダのどのような点を何故に批判するのか、という立ちいった議論は哲学学派の問題となる¹⁰⁾。

3 無常観と出家修行の志望 (子の立場)

MBh 12.169 にかえて見よう。先のような父のことばに対して、息子は世の非常 (無常) なることを説くことになる。

『息子は言った。

このように世間が打ちひしがれ、すべてに囲まれているときに、空しからぬものどもが過ぎ去るときに、賢者の如く何を言われるのか。

(7)

evam abhyāhate loke samantāt* parivārite /
amoghāsu patantiṣu kiṃ dhīra iva bhāṣase //(*P.12.277.7 sarvataḥ)
父は言った。

どのように世間が打ちひしがれているのか。或いは何によって囲まれているのか。

いかなる空しからぬものどもがここに過ぎ去るのか。一体何で〔汝は〕私を恐れさせるかのようなのか。

(8)

katham abhyāhato lokaḥ kena vā parivāritaḥ /
amoghāḥ kāḥ patantiḥa kiṃnu bhīṣayasīva mām //
息子は言った。

世間は死によって打ちひしがれ、老によって囲まれている。これら日夜は過ぎ去る。一体〔あなたは〕どうして覚らないのか。(9)』

mṛtyunābhyāhato loko jarayā parivāritaḥ /
ahorātrāḥ patanty ete nanu* kasmān na budhyase //
(Cr.12.169.7~9, P.12.175.7~9, P.12.277.7~9) (*P.12.277.9 patanti-me tac ca)

上の3偈に相当するものは、先のHattipāla-jātaka (*Jātaka* No.509) にはないが、Mūgapakkha-jātaka (啞躡本生物語¹¹⁾。 *Jātaka* No. 538, vol. VI, pp.1~30) にある。それは王位に即くことは地獄に行く業を作ることだと思って、出家を志し、生まれてから聾・啞・躡をよそおって通して捨てられて、ついに出家の機会を得た王子が、後に父王と対話を交わして、王に教示し、その結果ついに王も王妃も出家するという物語である。その父王との対話の中に、上の3偈に丁度対応するものがある。(以下の下線部は前記の *MBh* の語句と一致を示している。)

『〔王子はいう。〕常に世間が打ちひしがれ、そして常に囲まれている。空しからぬものどもが過ぎ去るときに、私を王位をもって濡らすのか。

niccam abbhāhato loko kena ca parivārito
amoghāsu vajantiṣu kiṃ mām rajjena siñcasi (102) (P.26¹¹⁻¹²)
〔父王はいう。〕何によって世間が打ちひしがれているか。また何によって囲まれているか。いかなる空しからぬものどもが行き去るか。それを問われて

私に説明されよ。

kena-m-abbhāhato* loko kena ca parivārito
kāyo amoghā gacchanti tam me akkhāhi pucchito (103) (p.26¹³⁻¹⁴)
〔*abbhāgato を下の註釈 (p.26²⁸) によって訂正した。〕

〔王子はいう。〕世間は死によって打ちひしがれ、老によって囲まれている¹²⁾。空しからぬ夜は去り行く。このように知れ。クシャトリヤ（王侯）よ。』

maccun' abbhāhato loko jarāya parivārito
ratyā amoghā gacchanti evaṃ jānāhi khattiya (104) (p.26¹⁵⁻¹⁶)

父王は諸の享楽とともに王位をもって王子の帰還を求めるが、王子は世の非常なること、死は避けられないことを説きつつ、出家の志を貫く。そのような文脈の途中に上のような対話がある。なおここでは、父のことばの中にヴェーダを学習し云々ということはない点では、先に見た *MBh* 1.169 の文脈とはちがう。その問題は Hatthipāla-jātaka (*Jātaka* 509 gāthā 5) に述べられていることは、先にふれた。

さらに上の3偈にはほぼ対応するのが、*Utt.* XIV.21~23 である。いまその原文とそのサンスクリット訳と和訳とを示してみよう。(先の *MBh* の文と一致するところを下線で示す)

abbhāhayammi logammi savvao parivārie /
amohāhiṃ paḍantihiṃ gihamsi na raṃṃ labhe // (*Utt.* XIV.21)
(=abhyāhate loko sarvataḥ parivārite /
amoghābhiḥ patantibhir gr̥he na raṃṃ labhe //)¹³⁾

『〔息子は言う。〕世間が打ちひしがれ、すべてに囲まれているときに、空しからぬものどもが過ぎ去るのに、〔私は〕家において喜びを得ない。』

keṇa abbhāhao logo keṇa va parivārio /
kā vā amohā vuttā jāyā cimtāvaro hume // (*Utt.* XIV.22)
(=kena-abhyāhato lokaḥ kena vā parivāritaḥ /
kā vā-amoghā-uktā jātau cintāparo bhavāmi //)¹⁴⁾

『〔父は言う。〕何によって世間は打ちひしがれ、或いは何によって囲まれているか。或いは何が空しからぬものと言われているのか。子供らよ。〔私は〕気がかりだ。』

maccunā 'bbhāhao logo jarāe parivārio /
amohā rayanī vuttā evaṃ tāya vijānaha // (*Utt.* XIV.23)
(=mṛtyunā 'bhyāhato loko jarayā parivāritaḥ /
amoghā rajanya uktā evaṃ tāta vijānita //)

『〔息子は言う。〕死によって世間は打ちひしがれ、老によって囲まれている。夜は空しからぬものと言われている。父よ。このように認識されよ。』
以上の3偈は先の *MBh* の偈とよく対応することを見た。

上において、息子のいうところは、我々は日夜、老死の危機にさらされているのであるから、悠長にヴェーダの学習や家庭生活に時を過ごしてはられない、というのであろう。無常迅速であり、いつも死の危険に接しているからこそ、出家学道を勧めるのは、仏教である、と考えられるけれども、仏教に限らないことが、ここにも知られるのである。

上の最後の偈は *MBh* (Cr.) 12.309.17 (P.12.321.18) と対比される。そこには

『世間は死によって打ちひしがれ、老によってさいなまされており (pari-piḍita), 空しからぬもの (日夜) が過ぎ去るのに、法の乗物 (dharma-yāna, P. dharma-pota 法の船) によって渡れ』

とある。老死につきまといわれているときに、それを克服すべく法即ち善に努めるべきことを強調するのである。

また先の章にかえろう。以下息子のことばが続く。第9偈に続いて P (= Cr.12.465*) は

『そして空しからぬ夜々もまた、常に来てはまた行く (去る)』
という。「空しからぬ」(amogha) という語が繰返されるが、それが夜 (rātri) の形容とされている。ニーラカンタは amogha を説明して『寿命を奪うこと (āyur-haraṇa) によって結果を伴う夜々』と第7偈の註にいう。寿命は夜 (即ち時) を過ごすごとに短くなるので、夜 (時) は重要な意味をもつことを述べるのだ、というのであろう。次に

『私が、死はとどまっていないうことを知るときに、その私が、どうして網によって蔽われてゆきつつ (jālenāpihitaś caran) [出家学道を] 待とうとしようか。(10)』

(Cr.12.169.10, P.12.175.10, P.12.277.10)

という。上の jālenāpihitaś は P では2回とも jñānenāpihitaś となっている。その意味が「知によって蔽われて¹⁵⁾」であるのか、「知によって蔽われないで¹⁶⁾」であるのか、解釈が分かれる。後の解釈はニーラカンタ¹⁷⁾によるのであるが、「知によって蔽われ」即ち、無常迅速なることを知ったままで、悠長に待っていることはできない、と解することができよう。「待つ」というのも明らかでないが、出家学道を遠い将来に待つことはできない、と考えられる。

『夜々過ぎ去るごとに、寿命がますます短くなるときに、(rātryām rātryām vyatitāyām āyur alpataṛam yadā)

そのときに、浅い水にいる魚のように、誰が楽 (幸福) を得ようか (gā-dhodake matsya iva sukhaṁ vindeta kas tadā)。

まさにその日 (divasa) は不毛であると、具眼の士 (vicakṣaṇa) は知るべし。(11)』(Cr.12.169.11, P.12.175.11-12ab, P.12.277.11)

P.12.175 では上の2行目と3行目とが入れかわっており、P.12.277 では3行目を欠いている。夜ごとに寿命が短くなっているのに安閑としては居られない、という意味である。その意味は仏教では *Udānavarga* 1.33 に

『蓋し夜と昼とが過ぎ去ると、どの人々の寿命もますます短くなるであろうに——乏しい水における魚どものように——彼らに一体何の楽しみがあるろうか』

yeṣāṁ rātri-divāpaye hy āyur alpataṛam bhavet /

alpodake va matsyānām kā nu teṣāṁ ratir bhavet //¹⁸⁾

とある。語句の一致（上に下線で示した）は少ないが、乏しい水における魚の比喩とともに、意味の一致がある。

上の偈とほぼ同じ意味のものがさきにもふれた *Mūgapakkha-jātaka* の第101 偈に出ている。（下線部は *MBh* 12.169.11 とほぼ同じ語句）

『夜の明け方に〔なる毎に〕、どの人の寿命もますます短くなるであろうに——乏しい水における魚どものように——そこにおいては若さ (komāraka) は一体何であろうか』

yassa ratyā vivasane āyūṁ appataṛam siyā

appodake va macchānam kin nu komārakam tahiṁ (101)

(*Jātaka* vol.VI, p.26⁹⁻¹⁰⁾)

ここでも寿命が日夜短くなることをもって、出家して修行する理由とする。その点は *MBh* 12.169.11 の前後の趣旨と一致する。

また上の偈は *Gāndhārī Dharmapada* 145 に一致する。即ちその原文は

yasa radi vivasiṇa ayu aparado si'a

apodake va matsaṇa ki teṣa u kumulaṇa (X.6)

であり、その意味は先のジャータカの第101 偈と同じである¹⁹⁾。

MBh 1.169.11 の後に数種の写本は次のような3行を挿入している。

『いつでも最初の夜分に胎児は母に入る、

その同じ夜分に〔寿命の〕終る人は死へと向かう。

その夜が過ぎ去るときに〔その彼は〕いかなる善をも行わないであろう』

yām eva rātriṃ prathamām garbho bhajati mātaram /
tām eva rātriṃ prasthāti maraṇāya nivartakaḥ /
yasyām rātryām vyatītāyām na kimcic chubham ācaret /
(Cr. 12. 466*)

これも人の命の無常なることを説いているのであり、善を行わないうちに死んでしまうことを警告しているようである。上に対しては *Udānavarga* 1.6 が比較される。

『いつでも最初の夜分に母胎に住する人は、安定しないで移って行き、行っ
ては戻ってこない。』

yām eva prathamām rātriṃ garbhhe vasati mānavaḥ /
aviṣṭhitaḥ sa vrajati gataś ca na nivartate //²⁰⁷

1行目の語句はよく類似しているが、趣旨は違うようだ。ここでは母胎に生命（魂）が宿ったとしても、胎児として生長しないでどこかに行ってしまうことを述べているのであろう。漢訳の『出曜経』の解釈はそうである²¹⁷。しかしここでも無常観を表していることにはかわりはない。ちなみに、*Udānavarga* のこの章（第1章）は *Anityavarga*（無常品）といい、世の無常、人の生の無常をうたう偈を集めているのである²²⁰。上に対しては *Jataka* No. 510 *Ayoghara-jātaka*（鉄屋本生物語）²³⁰ の第1偈が比較される。その原文は

yam ekarattim pathamaṃ gabbhe vasati mānava
abbh'utthito va sayati sa gacchaṃ na nivattati (*Jātaka* vol. IV, p.
494¹⁻²) (いつでも一夜最初に母胎に住する子は、生じた雲のように横たわ
る。それが行くと戻ってこない)

であるが、H. Lüders, *Beobachtungon Über die Sprache des Buddhistis-
chen Urkanons*, Akademie-Verlag Berlin 1954, §105, pp. 89-90 は *Udā-
navarga* 1.6, *Kharoṣṭhī Dhammapada* C^{vo} 5 (即ち John Brough, *The
Gāndhārī Dharmapada* 144 にあたる) や *Hitopadeśa* 4.84 と対比しつつ、
ekarattim を eva rattim, abbhutthito を aviṣṭhito (=aviṣṭhitaḥ), va
sayati を sa vayati (=sa vrajati) と改めている。*Gāndhārī Dharmapada*
144 はリュースダースの右の解釈を支持する原文を示している。即ち
yam eva paḍhama radi gabhi vasadi maṇavo

aviṣṭhidu so vayadi so gacchu na nivatadi (X.8)

これはつまり先の *Udānavarga* 1.6 (の和訳) と同意となる。このジャータ
カも子（王子）が父（王）に対して、人は死を免かれなと世の無常を説いて
出家の志を貫く物語である。

このジャータカと同様の物語は *Jātakamālā* xxxii *Ayogṛha-jātaka* に見
られるが、その第21偈（第1行）が先の例と類似する。即ち
yām eva rātriṃ prathamām upaiti garbhe nivāsaṃ naravīra lokaḥ /
tataḥprabhṛty askhalitaprayāṇaḥ sa pratyaḥam mṛtyusamīpam eti//
(人の勇者よ。いつでも最初の夜分に世人が母胎における住所に近づくとき
より始めて、彼は進路を誤らずに日毎に死の近くに行く。)
全く同一の偈が *Hitopadeśa* 4.84 に出ている。但しそこでは悲しみを慰め諦
めさせる文脈の中に出ている点で、これまでのように出家の理由とする例とは
異なる。

次の第12偈 (*MBh* 1.169.12) も仏教の資料と共通の内容を示している。
『欲望を達成しないのに死は人に近づく。花 (P *puṣpa* ; Cr. は *śaṣpa*, 若草)
を摘みつつ心が余所にいつているものを、牝狼が羊を襲うように、死が奪っ
て行く。(12)』

anavāpteṣu kāmēṣu mṛtyur abhyeti mānavam /
śaṣpāṇīva* vicinvaṇtam anyatra-gata-mānasam/
vṛkīva-uraṇam asādyā mṛtyur ādāya gacchati //
(*MBh* Cr. 12.169.12, P. 12.175.13; P. 12.277.12 は右の第2行を始めに
し第1行を終りとし、第3行は P. 12.277.19a におく。*P: *puṣpāṇīva*)
原文2行目初めを *puṣpa*-(花) とする読み方を考慮すべきであると考えたが、
śaṣpa-(若草) とする読みを採用するならば、恐らくは

『若草を食んで心が余所にいつている羊を牝狼が襲うように、死が奪って行
く』
と訳すべきであるかも知れない。しかし今は前のように解しておく。つまり
「花（または若草）を摘む」というのは比喩的な表現で、人が快楽を追いかけて
いることを指している、と考えてみたのである。

右に対しては仏教の資料 *Dhammapada* 47-48, *Udānavarga* 18.14-15 が
比較される²⁴⁰。いまその両方の原文を対比して示してみよう。

<i>Dhammapada</i>	<i>Udānavarga</i> 18
47 pupphāni h'eva pacinantam vyāsatta-manasaṃ naram suttaṃ gāmaṃ mahogho va maccu ādāya gacchati	14 puṣpāṇy eva pacinvaṇtam vyāsakta-manasaṃ naram / suptam grāmaṃ mahaughaiva mṛtyur ādāya gacchati //
48 (ab=47ab) atittam yeva kāmēsu	15 (ab=18.14ab) atṛptam eva kāmēsu

antako kurute vasam tv antakaḥ kurute vaśam //

意味はともに同じく

『ただ花を摘み〔それに〕心とらわれている人を、〔例えば〕眠っている村を洪水が〔襲う〕ように、死が奪って行く。』

ただ花を摘み〔それに〕心とらわれている人を、欲望において満足しない中に、死（antaka, 死魔）が支配下におく』

となる。右の第1の偈と全く同じ意味を *Gāndhārī Dharmapada* 294²⁵⁾ も示すようである。さて先の *MBh* 12.169.12 と比較すれば、花を摘むという比喻と、欲望を達成しないうちに死が襲って来る、という点に一致があるが、先の狼の比喻はここになく、この洪水の比喻は先の例 (*MBh* 12.169.12) にな。しかし洪水の比喻は後で *MBh* 12.169.17 に出て来る。*MBh* と *Dhammapada* 等との親近関係がここにも認められる。

『まさに今や何でもよりよきこと (śreyas) を為せ。汝をこの時 (kāla) が過ぎ去るなかれ。なすべきことが未だ行われぬのに、まさに死 (mr̥tyu) が近づいてくる。(13)』

明日なすべきことを今なすべし。また午後〔なすべきこと〕を午前〔なすべし〕。

何となれば死はそれ（なすべきこと）が行われたか、或いは行われぬかを待たないのだ。

何となれば、誰にいま死の軍勢 (mr̥tyu-senā, P では mr̥tyu-kāla, 死の時) がやって来るかを、誰が知るか。(14)』

(*MBh* Cr.12.169.13-14, P.12.175.14-16ab, P.12.277.13-15ab)

死はいつ何時襲って来るかわからない。だから勤勉になすべきことを行うのに努めなければならない、というのである。その勤勉はここでは世俗的業務に対することではなくて、出世間的な世界をめざしているのが、この節の文脈のようである。そのような勤勉の教えは仏教にも処々見られるところであるが²⁶⁾、この *MBh* にも繰返される。即ち P 本等にこの章が繰返されるが、その外に右の第14偈は Cr.12.309.72 (右の第1行と第3行), 787* (同第2行) [=P.12.321.73 (同第1行と第2行)] に出ている。また Cr.12.169.14 の註記にはこの偈の前2行は *Vṛddhaśātātapa Smṛti* 65 に等しい、とあるが、筆者はその書を披見する機会を得ないので確認できない。

右に死の軍勢 (mr̥tyu-senā) といわれるが、この語は仏教にも知られている。*Majjhima-Nikāya* (『中部経典』) の第131経から第134経にかけて繰返され

る賢善一夜偈 (bhaddekarattiyo gāthā, 一夜賢者の偈) の中に

『過去を追うこと勿れ。未来を期待すること勿れ。』

凡そ過去なるものは捨てられた。未来のものは未だ至らない。

そして現在の法を、それぞれの処において観察し

ゆるがず動じないそれを知って修行すべし (anubrūhaye)。

今日こそなすべきことを熱心に〔なすべし〕。誰が明日における死を知っているのか。

蓋しあの大軍を有する死 (mahā-sena maccu) との遭遇はないのではないのだ。

このように住する熱心な、日夜怠らぬ

彼をこそ一夜賢者 (bhaddekaratta), 寂靜者, 牟尼という。』

(Vol. III, pp.187, 190, 193, 200)²⁷⁾

とある。とくに上の第5, 6行が先の *MBh* 12.169.14 の内容と殆ど一致している。上では、過去を追求めず、未来を期待せず、ひたすら今日の現在において努めるべきことを説いているのである。

MBh 12.171 にかえて見よう。次にこういう。

『まさに若者こそ法 (善) をならいとするもの (dharma-śīla) であるべし。何となれば生命はとらえられないもの (animitta, 無相。Pでは anitya, 無常) であるから。法 (善) を行えば、この世においては名声 (kīrti) があるであろうし、また死んでからは楽 (幸福) がある。(15)』

蓋し、愚癡によってとらわれ、子や妻のために齷齪する人は、なすべきことと或いはなすべからざることをなして、彼ら (妻子) に養育 (puṣṭi) を与える。(16)』

(Cr.12.169.15-16, P.12.175.16c-17, P.12.277.15c-17b)

第15偈は法すなわち善を行うべく、善を身につけるべきことを説く。その法 (善) は功德でもあって、死後の幸福の因となる。第16偈は次の偈の趣旨につながって、妻子にかかわっている者に死が襲う、といいたいのであろう。次はこうである。

『子や家畜に迷い、心執着したその人を、〔例えば〕眠っている虎に洪水が (Pでは、眠っている鹿に虎が) 〔襲う〕ように、死が奪って行く。(17)』

欲望に飽きることなくただ集めているそのものを、〔例えば〕虎が家畜を奪うように、死が奪って行く。(18)』

taṃ putra-paśu-saṃmattaṃ* vyāsakta-manasaṃ naram /

suptaṃ vyāghraṃ mahaugho vā** mr̥tyur ādāya gacchati // 17

saṃcinvānakam evaikaṃ*** kāmānām avitṛptakam /
vyāghraḥ paśum iḥa-ādāya※ mṛtyur ādāya gacchati // 18
(Cr. 12. 169. 17-18, P. 12. 175. 18-19, P. 12. 277. 17c-19b)

*P: -saṃpannam, **P. 12. 175. 18: vyāghro mṛgam iḥa, ***P: evainam
(これに従う。) ※P. 12. 277. 19: vṛkiva-uraṇam āsādyā.

ともに、突然に死が襲って来て生命あるものを奪って行くことを述べる。同様の意味はすでに第12偈においても見られたものである。

上の第17偈についてはパーリ *Dhammapada* 287 とそのサンスクリット文 *Udānavarga* 1.39 が同趣のものとして比較される²⁸⁾。

Dhammapada 287

Udānavarga 1.39

taṃ putta-pasu-sammattam	taṃ putra-paśu-sammattam
byāsatta-manasaṃ naram	vyāsakta-manasaṃ naram /
suttam gāmaṃ mahogho va	suptam grāmaṃ mahaughaiva
maccu ādāya gacchati	mṛtyur ādāya gacchati //

その意味は第3句を『眠っている村に洪水が〔襲う〕ように』とするほかは、先の *MBh* Cr. 12. 169. 17 に同じである。なお上の *Dhammapada* 287 bcd は同 47bcd に同じく、*Udānavarga* 1.39bcd は同 18.14bcd に同じである。それについては *MBh* Cr. 12. 169. 12 と対比して、先に見た通りである。いずれにせよ *MBh* と *Dhammapada* 等との関係がふかいことが示された。

第18偈は *MBh* にこの他にも繰返される。即ち Cr. 12. 309. 19 (P. 12. 321. 20), Cr. 12. 317. 24 (P. 12. 330. 24) がそうである。但しともに P. 12. 277. 19 と同文で、第3句を vṛkiva-uraṇam āsādyā (牝狼が羊を襲うように) とする。即ち偈の後半は先に見た Cr. 12. 169. 12ef に同じである。偈の初めの「集めているもの」(saṃcinvānaka) とは、恐らく先の第12偈 (Cr. 12. 169. 12cd) のように、花 (または若草) を集めているものを指すのであろう。そう見ると *Dhammapada* 48, *Udānavarga* 18.14 (前記) が対比される。

次はこうである。

『これは行われた。これは行わるべきである。この他のものは半分行われた。このように、願望や楽にとらわれた人をば、死 (kṛtānta) は支配下に置く。』 (19)

idaṃ kṛtam idaṃ kāryam idaṃ anyat kṛtākṛtam /
evam iḥa-sukhāsaktam kṛtāntaḥ kurute vaśe //

『作られた業(karman, 行為)の果を未だ得ず、果に執着し(phala-saṅgin*), 田畑・市場・家屋に執着している人を、死は奪っていく。』 (20)

(Cr. 12. 19-20, P. 12. 175. 20-21, P. 12. 277. 19c-21b)

*P. 12. 175. 21b: karma-saṅjñita [業(行為)によって名づけられた],

P. 12. 277. 20d: karma-saṅgin [業(行為)に執着する]

『力劣る者と力ある者と勇者と臆病者と愚者と賢者と、あらゆる欲望の目的を達しないものを、死は奪って行く。』 (P. 12. 175. 22, P. 12. 277. 21c-22b, Cr. 12. 469*)

以上、死は思いもかけないときに、しかもあらゆる人に襲って来ることを、種々に述べるのである。そのような説き方は、仏教にも見られるところである。とくに上の第19偈に対しては、*Udānavarga* 1.41 が同様の趣旨を述べるものとして比較される。すなわち

『私によってこれは行われた。これを行ってからこれは行わるべきであろうと、このように、動揺している人 (martya, 死すべき者) びとを、老と死とは踏みにじる²⁹⁾。』

idaṃ kṛtam me kartavyam idaṃ kṛtvā bhaviṣyati /

ity evaṃ spandato martyām jarā mṛtyuś ca mardati //

語句の一致は少ないにしても、全体の趣旨は一致しているというべきであろう。

MBh 12. 169 にかえて見ると、次はこうである。

『死と老と病と〔いう〕多くの因を有する苦が、もし身体に付きまといてゐるならば (P. 12. 277. 23a: もし死すべき者 = 人によって捨てられないならば), どうして〔汝は〕安住している (svastha) かのように暮らしているのか。』 (21)

有身者 (dehin, ひと) が生まれるや否や、死 (antaka) は〔寿命の〕終りのために、また老もついていく。これら静止せるもの (植物) と動くもの (動物) との諸の存在 (bhāva) は両者 (老死) につきまといわれている。(22)』 (Cr. 12. 169. 21-22, P. 12. 175. 23-24, P. 12. 277. 22c-24b)

以上は老死が生きているものにとって不可避なることを説く文である。

次に家庭生活をしている者の楽しみは実は死にいたるものであり、繫縛であることを説く。

4 死の克服の道

『あるいは、およそ村に住む者の楽しみ (rati) とは、これはまことに死 (mṛtyu) の家 (gṛha, P: mukha, 口) である。凡そ森 (aranya) とは即

ち神々の集いの場所(goṣṭha)である,と天啓(śruti)はいう。(23)

およそ村に住む者の楽しみとは、これは縛る縄である。善行の者たちはこれ(縄=楽しみ)を断ち切って行く。悪行の者たちはこれを断ち切らない。

(24)

(Cr. 12. 169. 23-24, P. 12. 175. 23-24, P. 12. 277. 25c-27b)

村に住む者即ち在家の楽しみは実は輪廻繫縛の因であり、死への道であることを説くのであろう。それに対して出家して森に住することを勧める。上の第24偈は MBh (Cr) 12. 309. 70, 12. 316. 37 にも繰返される。

次に、死を超克すべき徳目を説くことになる。まず不殺生を説く。

『誰でも意・語・身の因によって、生類(prāṇa, P: jantu)を殺害しない者は、生命と実利を奪う*業(行為)によって、束縛されない。(*P. 12. 175. 27では、生類によって殺害されない。P. 12. 277. 28では、生類によって束縛されない。)

(25)

(Cr. 12. 169. 25, P. 12. 175. 27, P. 12. 277. 27c-28b)

続いて、死を克服するものとして、真実を強調する。

『死の軍勢(mṛtyu-senā)がやって来るのを決して誰も阻止しない。*捨てるべからざる(asamtyajya) 真実(satya)なくしては。というのは不死(amṛta)は真実に依存しているからだ。[*Pによれば、真実なくしては。非真実は捨てるべきである。(asat tyājyam)。……]

(26)

それゆえに、真実の誓戒を行い(satya-vrata-ācāra), 真実の実習に専心し(satya-yoga-parāyaṇa), 真実をよろこび(satyārāma), 平等にして、節制(自制)する者(dānta)は、真実によってのみ、死〔神〕(antaka)に勝つべし。

(27)

そしてまさに不死(amṛta)と、死(mṛtyu)とは両方とも身体にもとづいている。愚癡(moha)によって死にいたり、真実によって不死にいたる。

(28)

[Cr. 12. 169. 26~28, P. 12. 175. 28~30, P. 12. 277. 28c-30b, P. 12. 277 には上の第26偈に一致する偈はない。但し P. 12. 277. 25b=Cr. 12. 169. 26d (P. 12. 175. 28d) に等しい。]

真実(satya)とは、虚偽の反対であって、嘘を言わないことと考えられる。真実語はしばしば奇蹟を生ずる不可思議な力をそなえている、ということが、MBh等や仏教(ジャータカやアヴァデーナ)において処々に伝えられている³⁰⁾。ところが、上の第28偈においは、真実は愚癡と対比的に用いられている。ここ

から、真実とは嘘を言わないのみならず、真実の知を意味しているように考えられる。

更に徳目が並べられる。

『その私は不殺生をまもり(ahimsra), 真実を求め(satyārthin), 欲望と忿怒とを排除し(kāma-krodha-bahiṣkṛta), 苦と楽とに平等に(sama-duḥkha-sukha, P. 12. 277. 31a: samāśritya sukham 楽に依存して)安穩にして(kṣemin), 死を捨てるであろう。死なないもののよう(amarṭyavat, P. 12. 277. 31d: amṛtyuvat)。(29)

〔私は〕寂靜の祭祀をよろこび(śānti-yajña-rata) 節制(自制)し、梵の祭祀(brahma-yajña)に立ち、語・意・業(行為)の祭祀をなす(vāṇ-maṇaḥ-karma-yajña) 牟尼(聖者)として、〔死後に神路即ち〕太陽北行の路(udagāyana)にあるのであろう。(30)

殺生をする(himsra) 家畜の供犠(paśu-yajña)をもって、私のような者が、どうして供犠をすることができるか。智慧ある者は有限なる武士式供犠(kṣatra-yajña, P: kṣetra-yajña 国土の供犠)をもって、吸血鬼のように(piśācavat)〔供犠をすることができるか。〕(31)

(Cr. 12. 169. 29~31, P. 12. 175. 31~33, P. 12. 277. 30c-33b)

ここには特に不殺生が説かれる。先にはヴェーダの規定する供犠(祭祀)も、不殺生という観点からここで否定される。不殺生を重んじ供犠を否定することは仏教にもジャイナ教にも見られるし、後のサーンクヤ派でも言うところである³¹⁾。供犠(殺生を伴う)への批判は、それなりに広い支持を得ていたと考えられる。

但し、供犠への批判や供犠の放棄は、右においても、出家者の生き方において見られることに注意すべきであろう。四住期の中の第4の遊行期(pārivrajya)は遁世遊行(sannyāsa)の生活をするのであるが、そのサンヌヤーサ(遁世、捨離)とは、同時に供犠、行祭の放棄をも意味している。サンヌヤーサの是非の議論は、行祭の放棄の是非の議論となることは、サーンクヤ派(Yukti-dīpikā ed. by R. Ch. Pandeya pp. 16¹³~19⁸)や、ヴェーダーンタ派(Śaṅkara ad Brahma-sūtra 3. 4. 18~20)等において見られる³¹⁾。詳しくは別に考察したい。

次に、右の第30偈に「太陽北行の路」というのは、神路(deva-yāna, 天道)を指し、死後に神路を進んで、梵または梵天界に達することを理想としたものと考えられる。初期の古ウパニシャド(Chāndogya-Upaniṣad 5. 3~10, Brhadāraṇyaka-Up. 6. 2 等)に神路と祖道(pitṛ-yāna, 死後月界に至るが再び

この世に再生する道)との二道が説かれる³²⁾。その説をここに承けるのである。仏教は二道説を採用しない。

さて、この章の最後の6偈を見よう。

『凡そ、その語と意とがつねに正しく向けられ、苦行〔と〕捨離 (tapatyāga) とヨーガ (P.12.175.34 では真実) があるものこそは、一切を得るであろう。 (32)

明知 (vidyā) に等しい眼なく、明知に等しい力 (bala; P.12.277.35: phala, 果) なく、(P.12.175.35では、真実に等しい苦行なく)、貪欲 (rāga) に等しい苦はなく、捨離 (tyāga) に等しい楽はない。 (33)

アートマン(我)においてのみ、アートマンによって生まれ、アートマンに安住し、或いは子孫もなくとも、アートマンにおいてのみ (P.12.277.34: ātma-yajña アートマンを祭るものとして) 〔私は〕あるであろう。子孫は私を救わない。 (34)

婆羅門にはこのような〔よい〕財 (vitta) は〔他には〕ない。即ち孤独 (ekatā), 平等性 (samatā), 真実性 (satyatā), 戒行に立つこと (śīle sthitir, P.12.175.37: śīlam sthitir, 戒行, 安住), 罰杖を控えること (daṇḍanidhāna), 正直 (ārjava), そして処々において諸の行為 (kriyā) を休止すること。 (35)

婆羅門よ。まさに死ぬであろう汝にとっては、財をもって何としよう。また汝にとっては親族をもって何としよう。汝にとって妻たちをもって何としよう。洞穴 (guhā 心臓) に入っているアートマン(我)を求めよ。汝の祖父や父はどこに行ったか。 (36)

ビヘーシュマは言った。

子のことばを聞いて、父はそのようなにした。王よ。汝もまた、真実と法とに専念して (satya-dharma-parāyaṇa), そのようになせ。 (37)

(Cr.12.169.32~37, P.12.175.34~39, P.12.277.33c-39)

これをもって、この章は終る。上の第33偈は Cr.12.316.6 にくりかえされ、第38偈は Cr.12.309.71 にほぼ等しい。さて、上においては、欲を捨てて出家し、戒行に立って、明知を得べきことを説くのであるが、特にアートマン(我)の探求を説く。そのアートマンとは何か、必ずしも明確ではないが、洞穴(心臓)に入っている、という点は、*Kaṭha-Up.* 2.20 や *Śvetāśvatara-Up.* 3.20 等にも述べられている³³⁾ように、個人の靈魂としてのアートマンであろうが、同時に超個人的世界靈魂でもあろう。だから第34偈に「アートマンにおいてのみ、アートマンによって生まれ、アートマンに安住し」といわれるのであろう。そ

ういうアートマンの探求を説くところにおいて、仏教とは距たってくる。

最後のアートマンを求める点を除けば、人生の無常を説いて、出家の生活を志すべきことを示唆するこの章は、仏教およびジャイナ教と共通のテーマを扱っている、といえよう³⁴⁾。

そして、出家の生活は、無欲、無所有を理想とする。無所有を説くのは次の2章 (*MBh* 12.170-171) である。その中、とくに仏教と共通の素材が認められる第171章については、先に見た通りである³⁵⁾。

註

1) P.12.277.4 の後半は異なり

『解脱と法(義務, 善)に通暁していない〔父〕に、解脱と法に明るい〔息子〕は〔言った〕』

の意となる。なおPは第5偈の前に『息子は言った』という語を加える。

2) Śaṅkara, *Brhadāraṇyaka-Upaniṣad-Bhāṣya* 4.5.15

(*ĀnSS* 15 p. 715⁶⁻⁷) に引用される。但しそこでは第1行目中間を putra-pauṭrān とする。

3) 『南伝大蔵経』第35巻 185~215 ページ (高田修訳) 参照。

4) 仏教の *Sutta-nipāta* 3.2 Padhāna-sutta (精勤経) によれば、仏陀が Nerañjarā (尼連禪河) の畔で禪定に励んでいるところに、悪魔 (Māra=Namuci) が近づいて、生命にかかわるから精進を止めることをすすめる、

『汝が梵行を行じ、〔祭〕火への供物 (aggihutta) を捧げるならば、多くの福德 (puñña) が積まれる。精進 (padhāna, 精勤) をもって何をなされるか』(*Sutta-nipāta* 428)

という。仏陀の態度は勿論、決然として精進を続けるというのである。これもまたヴェーダの祭祀の批判を含むという点で「父子の対話」に類似の対話と考えられよう。但しここには林住期、遊行期への言及はない。

5) Jarl Charpentier (ed.), *The Uttarādhyayanasūtra being the first Mūlasūtra of the Śvetāmbara Jains*, Upsala 1932 1. pp.119~125 (原文); 2. pp.332~335 (註記)。

Paṃnyāsaśribuddhivijayagaṇi-saṅkalita-saṃskṛta-chāyā-sahitāni *Srīmanty Uttarādhyayanasūtrāṇi* (Śrī Virasamāja ed.), Rājānagara 1932, pp.78b~84a) (原文とサンクスクリット訳) 参照。

H. Jacobi (tr.), *Jaina Sūtras Part II (Sacred Books of the East vol. XLV)* pp.61~69 (英訳)

Jarl Charpentier, *Studien über die indische Erzählungs-literatur*, ZDMG 62, 1908 pp.725~747 (*Jātaka* No.509 や *MBh* との比較研究) 参照。

6) *Utt.* XIV.48 には Usuyāri とあり、ヤコービは Ishukāri (即ち Iṣukāri) とおきかえている。一方 *Utt.* XIV.3 には Usuyāra という名で出ており、ヤコービは Ishukāra (=Iṣukāra) とおきかえている。Virasamāja の刊本でも同じ。

7) 前記 Virasamāja の刊本を参照したが、逐語的にサンスクリット形におきかえた。

なおプラークリット原文には双数 (dual) はなく、複数が用いられているが、ここでは 2 人の息子に対してということばであるから、最後の一句を Virasamāja 本にしたがい双数とした。

- 8) veyā ahiyā na bhavanti tāṇaṃ bhuttā diyā ninti tamaṃ tameṇaṃ /
jāyā ya puttā na havanti tāṇaṃ ko nāma te aṇumannejjā eyaṃ //
(= vedā adhitā na bhavanti trāṇaṃ bhojitā* dvijā nayanti tamaṃ tamasā /
jātās ca puttā na bhavanti trāṇaṃ ko nāma te anumanyeta-etat //)

*bhutta は bhukta に相当するが意味上 bhojita をあてた。Virasamāja 本に従う。

なお上 (Utt. XIV. 12) は Jātaka No. 509 の第 5 偈 (前記) と比較されるが、この外にも、両者に類似する偈があることを、シャルパンティエは指摘している (ZDMG 62, 1908 pp. 725~747)。いま同ジャータカの偈番号を左に出し、右にそれに相当する Utt. XIV の偈の番号を示して見よう。

Jātaka No. 509 Hatthipāla-jātaka	Uttarādhyaṇa-sūtra XIV
4	9
5	12
7	27
10	20
15	29
16	36
17	44-45a
18	38
20	48

- 9) 『およそ讃歌・祭詞・歌詠と呼ばれるこの行事の群 (kriyā-kalāpa) はすべて無価値 (vigraha) であると認識している私には、[それは] 正しい (samyak) とは思われない。

故に (tasmāt), 覚悟ができ (utpanna-bodha), 師の認識に満足し (guru-vijñāna-tripta), 願望なく (nirīha), 善を本性とする者 (sadātman) には、ヴェーダに何の用がある』 (Mārkaṇḍeya-purāṇa X. 28-29)

- 10) たとえば Sāṃkhya-kārikā 2 とその註釈、とくに Yuktidīpikā 参照。
11) 『南伝大蔵経』第 37 巻、350-420 ページ (高田修訳) 参照。この物語は Cariyāpiṭaka pp. 28-29 (Temiyapaṇḍitacarita) (『南伝大蔵経』第 41 巻、松濤誠廉訳 所行蔵経、409-411 ページ)、『六度集経』巻 4 (38) (『大正』3. 20 中下)、『太子慕魄経』(同、408 中-409 下)、『太子墓魄経』(同、410 上下)、『根本説一切有部毘奈耶』巻 19 (『大正』23, 724 上-726 上) にも見られるが、今問題とする偈は見あたらない。また Bharhut の彫刻にも Mugapakiya-jātaka の銘とともに描かれており、この物語が古くより流布していたことが知られる。杉本卓洲「ジャータカとボサツ」(『宗教研究』167 号、1961 年 3 月、51 ページ) 参照。その図は A. Cunningham, The Stūpa of Bharhut 1879, Plate XXV. 4 (『南伝大蔵経』第 37 巻の巻初の挿図 7 はその転写) に出ている。なお MBh 1. 169. 7~9 が Jātaka No. 538 gathā 102-104 に比較されることについて Cr. の編者は気づいていないようだ。

- 12) なお第 1 行目は Sutta-nipāta 581 evaṃ abbhāhato loko maccunā ca jarayā

ca (このように世間は死と老とに打ちひしがれている) とほぼ同趣である。

- 13) Virasamāja 本は labhāvahe とするが、いまは原文にできるだけ近いままで理解しようとした。なお labhet と考えられる。
14) 但しシャルパンティエは hume を bhavāmi と説明するのに疑問をさしはさみ hume=khalu me であろうとし、もしそうならば cintāpara は実名詞として用いられているとして、Cp. Turner JRAS 1913 p. 302 と註記する (The Uttarādhyaṇasūtra 2 p. 334)。R. L. Turner は Dvāviṃśatyavadānakathā という仏教の物語 (多くは Avadānaśataka から借用している) の本の言語の研究 Notes on the Language of the Dvavimsatyavadanakatha (JRAS 1913 pp. 289~304) において、cintāpara, thought とのみ記している (p. 302)。その本は未刊であろうし、確認できない。シャルパンティエの提案も、したがって未決定のままでであろう、と考えられる。なお bhavāmi に対しては homi が相当する。
15) P. Deussen, Vier Philosophische Texte des Mahābhārata p. 119: was kann ich mir davon versprechen, daß ich, von dem [vedischen] Wissen umhüllt, dahinginge.
16) Pratap Chandra Roy (tr.), The Mahabharata vol. IX p. 6: how can I pass my time without covering myself with the garb of knowledge.
17) apiśabdasya bhāgurimatena akāralopaṃ kṛtvā naḥ-samāsaḥ (api という語はバハグリの見解では a 字の脱落となして、否定 na の複合語である。) また前註のロイの英訳の註記参照。
18) Franz Bernhard, Udānavarga (Sanskrittexte aus den Turfanfunden X, Göttingen 1965) p. 108¹⁻².
『法句経』巻上 (『大正』4, 559 上 24-25) および『出曜経』巻 3 (『大正』4, 621 中, 下。また巻 2, 616 中) には次のようにある。
是日已過 命則随滅 如少水魚 斯有何楽-
Dhammapada と Udānavarga と漢訳資料との比較には、丹生実憲『法句経の対照研究 法句経の発展成立史研究』(昭和 43 年、兵庫県氷上郡市島町岩戸寺)、水野弘元「法句経対照表」(『仏教研究』第 3 号、第 4 号、第 5 号。昭和 48 年、49 年、51 年) 参照。
19) 但し teṣa (=teṣam 彼らの) は tahiṃ (そこにおいて) と同じでない。yasa (=yasya) …teṣa (=teṣām) の関係とすると、やや破格であろうから、疑問があるようだ。
20) この漢訳としては『出曜経』巻 1 (『大正』4, 612 下) に
若如三初夜 識降母胎 日涉遷變 逝而不還
『法集要頌経』巻 1 (『大正』4, 777 上 17-18) に
譬如三人初夜 識託住母胎 日涉多遷變 逝而定不還
21) 『大正』4, 612 下 25 に
識処母胎 生滅不停 亦復如是
という。
22) 漢訳の『法句経』にも「無常品第一」があるが、この偈を含まない。『法句譬喻経』も同様。『出曜経』も「無常品第一」を初めにおく。但し『法集要頌経』は「有為品」と称している。

23) 『南伝大蔵経』巻35, 216-230 ページ（高田修訳）参照。これは、生まれて以来、女夜叉から護るために鉄の家の中で育てられた王子が成年に達して、父王に会ったとき、人の生の無常を説いて、出家の意志を貫く、という物語である。これと同様の物語は *Jātakamālā* xxxii *Ayoggha-jātaka*, *Cariyāpiṭaka* p.26 (Ayoggharacariya) (『南伝大蔵経』第41巻405-407, 松濤誠廉訳) にも見られる。

24) 漢訳『出曜経』巻19, 華品第19 (『大正』4, 710中下) に

如_レ有_二採_レ華 專意不_レ散 村陲水漂_一 為_レ死所_レ牽
如_レ有_二採_レ華 專意不_レ散 欲意無_二厭_一 為_レ窮所_レ困

『法集要頌経』巻2, 華喩品第18 (『大正』4, 786 中) に

如_下人採_二妙華_一 專意不_二散乱_一
因_レ眠遇_中水漂_上 俄被_二死王降_一
如_下人採_二妙華_一 專意不_二散乱_一
欲意無_中厭足_上 常為_レ窮所_レ困

とあり、パーリ文やサンスクリット文に一致すると考えられる。

25) puṣaṇi ye va payiṇadu vasita-maṇasa nara sutu gamu mahoho va ada… (欠文があるが *Dhammapada* 47 に逐語的に一致する。)

26) 仏陀が入滅直前に言われた、いわゆる最後の遺教に『諸行(万象)は壊滅を性とする。不放逸に努力せよ』(vaya-dhammā samkhārā, appamādena sampādettha) とパーリ文 Mahāparinibbāna-suttanta (*Digha-Nikāya* vol.II.p.156) にあるのは有名であり、『長阿含経』遊行経 (『大正』1, 26中) にも、不放逸を教え万物の無常を説いている。〔但しサンスクリット文 *Mahāparinirvāṇasūtra* (ed. by E. Waldschmidt, III. p.394) では、沈黙を命じ、諸行は壊滅を性とする、と説いている。〕

また *Udānavarga* の第4章は Apramāda-varga といい、不放逸を説く偈が集められている。不放逸 (apramāda) とは結局、勤勉であり、つとめはげむことでもあるであろう。なお中村元博士はその章を「はげみ」と訳されている。(岩波文庫『真理のことば 感興のことば』172ページ)。

27) この偈とその説明から成る経が *Majjhima-Nikāya* vol.III に4つ (Nos.131~134) あり、『中阿含経』に三経 (巻43, Nos.165~167) ある。両者の関係を示すと次のようになる。

No.131 Bhaddekaratta-sutta

132 Ānanda-bhaddekaratta-sutta (167)阿難説経

133 Mahākaccāna-bhaddekaratta-sutta (165)温泉林天経

134 Lomasakaṅgiya-bhaddekaratta-sutta (166)釈中禪室尊経

なお最後の経に対しては、『仏説尊上経』(竺法護訳, 『大正』2, 886 上) が同類の異本である。この偈が重視されたことが、以上から知られよう。漢訳では次の通り。

慎莫_レ念_二過去_一 亦勿_レ願_二未来_一

過去事已滅 未来復未_レ至

現在所_レ有法 彼亦当_レ為_レ思

念無_レ有_二堅強_一 慧者覺_レ如_レ是

若作_二*聖人行_一 孰知_レ愁_二於死_一 (*学とするとところもある。)

我要不_レ会_レ彼 大苦災患終

如_レ是行_二精勤_一 昼夜無_二懈怠_一

是故常当_レ説_二 跋地羅帝偈_一

(『中阿含経』巻43, 『大正』1, 697 上, 中, 698 中, 下, 699 中, 下, 700 上)

右の4~6行目がパーリ文と異なり、死の軍勢への言及はない。また上の異訳には

過去当_レ不_レ憶 当来無_二求念_一

過去已尽滅 当来無_レ所_レ得

謂現在之法 彼彼当_二思惟_一

所_レ念非_二牢固_一 智者能自覚

得已能進行 何智憂_二命終_一

我*心不_レ離_レ此 大衆不_レ能_レ脱

如_レ是堅牢住 昼夜不_レ捨_レ之

是故賢善偈 人当_レ作_二是観_一 (『仏説尊上経』, 『大正』1, 836 中)

とあって、やはり4~6行目がパーリと異なっている。

また『瑜伽師地論』巻19 (『大正』30, 387下-188上) には

於_二過去_一無_レ恋 不_レ稀_二求未来_一

現在諸法中 处处遍觀察

智者所_二増長_一 無_レ奪亦無_レ動

という偈を賢善頌 (188上) といって引いて説明している。これは上記パーリ文 (和訳) の初4行の中、第2行を除いたものに相当する。

28) 漢訳『法句経』巻下, 道行品第28 (『大正』4, 569 中13-14) に

人當_二妻子_一 不_レ観_二病法_一 死命卒至 如_二水湍驟_一

(『法句譬喩経』巻3, 『大正』4, 598 上9-10 も同文)

とあるのが参照される。が、さらに『出曜経』巻3, 無常品第1 (『大正』4, 624上) に
生_レ子歛豫 愛染不_レ離 醉遇_二暴河_一 溺没_二形命_一
とある。

29) 『出曜経』巻3, 無常品第1 (『大正』4, 625上10-11) に

為_レ是当_レ行_レ是 行_二是事_一成_レ是

衆人自勞役 不_レ覺_二老死至_一

『法集要頌経』巻1, 有為品第1 (『大正』4, 777 下26-27) に

如_レ是諸有情 挙動貪_二榮樂_一

無常老病侵 不_レ覺_二生_一苦惱_一

『法句経』巻1, 無常品第1 (『大正』4, 559 中8-9) に

是務是吾作 当_二作令_一致_レ是

人為_二此踰擾_一 履_二踐老死憂_一

とある。

30) *MBh* 等における真実語 (satya-kriyā) の用例およびその研究史 (文献) については原実『古典インドの苦行』(昭和54年, 春秋社) 9-10, 16, 439-440, 446ページ参照。また同「tapas, dharma, puṇya (=sukṛta)」(平川彰博士還暦記念論集『仏教における法の研究』昭和50年, 春秋社) 517, 538 ページ参照。

ジャータカやアヴァダーナの類における例については、奈良康明「真実語についてー仏教呪術の一側面ー」(『日本仏教学会年報』第38号, 昭和48年, 19-38ページ) 参照。また

Eugene Watson Burlingame, The Act of truth (saccakiriya): A Hindu spell and its employment as a psychic motif in Hindu fiction, *JRAS* 1917 pp.429~467 参照。

- 31) 拙稿「インド哲学における知と行—jñāna と karman に関する *Yuktidīpikā* の議論—」(『日本仏教学会年報』第45号, 昭和55年) 参照。
- 32) 拙稿「五火二道説の展開」(『印度学仏教学研究』第27巻第2号, 昭和54年3月, 47-52ページ), 「死後の運命と知と業—五火二道説考—(上, 下)」(『文化』第43巻第1・2号, 昭和54年9月, 30-48ページ, 第44巻第1・2号, 昭和55年9月, 1-15ページ)。
- 33) 拙著『サーンクヤ哲学研究—インド哲学における自我観—』(春秋社, 昭和53年) 550-551ページ参照。
- 34) 中村 元「生活者の倫理—マハーバーラタにおける主張—」(『法華文化研究』第3号, 1977年)の中に, この章の和訳があり(61-66ページ), 「父と子の対話—無常と人生—」と題している。しかし中村博士はここに「出家の志向」を読みとってはいない。
- M. Winternitz は, この章にバラモンの道徳と行者の道徳との対立を見, 息子の代表する人生観は仏教徒やジャイナ教のものであるという。*Geschichte der indischen Literatur* 1 Bd. S.360, 中野義照訳『叙事詩とプラナーナ』(高野山大学, 1965年) 124ページ。

- 35) 拙稿「無欲と無所有—マハーバーラタと仏数(1)—」(『東北大学文学部研究年報』第29号, 昭和55年3月)

補註(1) *MBh* の版本等の略号

Cr.=*The Mahābhārata for the first time critically edited* by V.S. Sukthankar (and others), 22 vols, Bhandarkar Oriental Institute, Poona 1933~59. この番号に従う。

P=*Mahābhārata with the Commentary of Nilakanṭha*, Poona 1929~33.

D=P. Deussen und O. Straus, *Vier philosophische Texte des Mahābhārata: Sanatsujātaparvan-Bhagavadgītā-Mokshadharma-Anugītā*, Leipzig 1906.

補註(2) 本稿脱稿後に N. S. Shukla ed., *The Buddhist Hybrid Sanskrit Dharma-pada*, K. P. Jayaswal Research Institute, Patna 1979 が刊行された。(BHS Dh と略。)

Dhammapada 47-48, *Udānavarga* 18.14-15 (上記61-62ページ) に対しては BHS Dh 128-129 が対比される。すなわち

128 puṣpāṇi heva pracinantam / vyāsatta-manasaṃ naraṃ /
suttam grāmaṃ mahogho vā / maccur ādāya gaccati // (8.8)

129 (ab=128 ab)

asaṃsannesu kāmesu / antako kurute vaṣe // (8.9)

意味も大体同じ。asaṃsanna は *Udānavarga* 18.15 の atṛpta と同一ではないが, 結局同趣となるのであろう。

Dhammapada 287, *Udānavarga* 1.39 (上記64ページ) に対しては BHS Dh

365 tam putra-paśu-saṃmattam / vyāsatta-manasaṃ naraṃ /
suttam gāṃmaṃ mahogho vā / maccur ādāya gacchati 11 (20.8)

が対比される。意味は *Dhammapada* 287 に同じである。

サーサナーランカーラ・サーダン (SĀSANĀLANKĀRA CĀTAMṚ)

—ビルマの仏教史に関する伝承の記録—

〔2〕

池 田 正 隆

(大谷高等学校教諭)

§ 2 第一回仏典結集が举行されねばならなかったことについて の要約

1. 【P.12】¹⁾ 善法, 不善法, 無記法などにより善業, 悪業の原因と, 涅槃の諸果をお説きになられた世尊ゴータマ最勝仏が, 般涅槃に赴かれた後4か月目に, ラージャガハ<王舎城>国のアジャータサットウ<阿闍世>王に依拠して<協力していただいて>, 尊者マハーカッサパ<摩訶迦葉>を上座とする阿羅漢五百人が第一回仏典結集をご举行なさいました——と, 〔この〕サーダン<記録文書>の質問のところにありました²⁾。〔それは〕原因がないのに仏典結集<合誦>をなさったということではありません。事情が特別にあって仏典結集が举行されました。〔その〕特別の事情とは, ——全智者なる仏陀が般涅槃に赴かれて7日を経た時, 一千二百五十人³⁾の比丘僧伽と共にパーワー Pāvā 国からクシナーラ Kusināyura (>Kusinārā) 国へ行かれる旅の途中の尊者マハーカッサパは, 〔み仏が〕ご入滅なされたことを聞いた比丘僧伽一同が号泣しているところで, 年老いて出家せる⁴⁾スバッタ Subhad (>Subhaddha) <須拔(陀)>比丘の「号泣するな。何を心配することがあろうか。ゴータマ〔仏陀〕が亡くなって, 私たちは為したいことや好きなことができるではありませんか」との言葉をお聞きになられて, 「この比丘のような異議 visabhoga⁵⁾によって, 優れたご教説が破壊されていくことになるのであろうか」と, 教法に対し畏懼心 Dhammasaṃveha⁶⁾<心配>が生じました⁷⁾。

2. 【P.13】「今日では, まだ黄金に等しい〔み仏の〕ご遺体が明らかに存在しているのに, 刻苦してご完成なされたご教説の中に, 非常に大きな災難,